

沖

12  
2015

俳句雑誌【おき】



# 墓前太鼓

能村 研三

## 河口湖の紅葉

先日多摩支部の阿部眞佐朗さん・能美自一朗さんと一緒に河口湖に住まいの長岡新一さん千波さんご夫妻をお訪ねした。

長岡さんは、この度第一句集『青海海』を上梓されたが、現在はほぼ寝たきりの状態でお見舞いを兼ねてお顔を拝見することにした。

八王子で待ち合わせて阿部さんが車を運転してくれて中央高速道路を一路河口湖へ向かった。中央高速道路の八王子と相模湖の間は、私が大学を出て間もなく建設会社に入社した時の工事現場で、この全区間を歩いて測量をしたことがあるので、沿道の景色は懐かしかった。

この日は生憎の曇り空で時折折雨がぱらつく天気だったが、河口湖の湖畔は紅葉の盛りで、ウイークデーだったが、観光客も多く訪れていた。

長岡さんはご病気になる前は多摩支部の前身の西東京支部の支部長をお努めいただき、河口湖から千波さんと連れだつて車で八王子の句

荒 括りされしままなる雨後の萩

秋 灯のくらがり作る酒肆の路地

衣 被小躍り宥め剥がれぬる

陶 土搗く秋暮に深む水の音

木守柿トーナメントに勝ちしかな

戒名に沖と俳の字 鶉高音

秋蝶の高舞ふ墓前太鼓かな

名にぞ知る新酒名札の宇陀篁和紙

ビル間に「芽吹き稲荷」や冬うらら

紙を漉く伊勢商ひの江戸棚に

会に来ておられた。

数年前に句集を上梓されたい旨を話された時以来お会いしていませんが、大きな手術をされたあとながら、顔色も良く元気でお話しをされているので嬉しかったです。

これには千波さんの献身的な介護があり、長岡さんが句集のあとがきに「千波さんありがとう」と記された訳が理解できました。

長岡さんの句集『青樹海』は刊行後大変評判が良く、読売新聞の全国版に長谷川耀さんが紹介してくれたのも嬉しいことである。

水鳥の喫水線の白さかな

淑気とも熱気ともラガー入場す

料蝸の夜目にも白き波頭

眼力は視力にあらず鳥雲に

長岡さんは、現在も支部の句会にも出句され、毎月の投句も欠かさずされているが、病気のことは俳句に詠まず、今までに経験したことを思い出しながら、ベッドの脇のテレビでいろいろな場面を想像しながら俳句を作られているようだ。病気の辛さにも負けず前向きに俳句を作られているその姿勢に心打たれた。

# 蒼茫集



火の中へ

林昭太郎

秋冷やひかりの鈍き水たまり  
裏山に帰省のごとく烏瓜

弾丸のごとく蜂来る野分晴

吾亦紅

酒本八重

蜂の巢の一部屋塔えて厄日来る  
烏渡る消化試合の外野席  
美しき瓦斯の焰も雁の頃  
蓮の実の飛んで旅券の失効す  
火の中へ火を滴らせ秋刀魚焼く

桐の実

菅谷たけし

わが意思に文字従はずかねたたき  
玉堂の筆と硯と吾亦紅  
川越や昔もありし焼芋屋  
爽秋の昼の玉子をこつと割る  
男郎花この頃会話減りました  
深閑と秋思を独り行き戻り

桐の実が鳴る青空の深きより  
虫の音やひとつ残るは我待つ灯

もゆる朱

望月晴美

少年の日の嘘許し水澄めり  
陸橋の継ぎ目錆浮く秋ざくら

もゆる朱のどこかがさびし曼珠沙華  
赤とんぼ杭よりはなれ風となる

水を押し押し水中歩行爽やかに  
門火焚くひととき我も照らされて  
母のもの羽織りて灯火親しめり  
十二時間<sup>ミラー</sup>委ねし翼さやかなり

良 夜 安居 正浩

新蕎麦や上手にむすぶ箸袋  
ゆつくりと二人で老ゆる良夜かな  
萩の花風に飽きれば波になり  
栗飯の栗が顔出す炊飯器  
卒塔婆の傾き曼珠沙華日和  
金木犀の香の内に入るそつと入る

ぎりぎり 吉田 政江

雨弾く曼珠沙華にも長捷毛  
水位線ぎりぎりを耐へ曼珠沙華  
九月芝居木偶人形の白き顔  
ベルトサイン点灯一気に秋天へ

声を張る喜寿の集ひや新松子  
金秋の朝餉は由布の見ゆる席

けむり茸 大畑 善昭

踏まれては色即是空けむり茸  
岩風呂にをみなもをりて夕紅葉  
いささかの貸しをはたらず寒露かな  
心拾ふやうに拾ひぬ朴落葉  
枯蓮のつひにきれひに水の底  
身に沁みて誦す朝々の懺悔文

そろそろ 千田 百里

つつついと登四郎先生霧を来し  
赤とんぼ上りホームが好きらしく  
雁渡しそろそろ窓拭きでもするか  
急くないそぐな末子で生きて天高し  
虫たちはパーティー我はひとり酒  
吊皮につながりぬても秋の行く

曼珠沙華

松井志津子

咲くまでのそ知らぬ様や曼珠沙華  
水音を直立で聴く曼珠沙華  
咲くほどに薬のからまる曼珠沙華  
空澄めり天地返しの鍬高く  
コスモス田うねりて入日巨きくす  
紅葉高遠かつ散る幽閉の間の文机

貫 禄

宮内とし子

総持寺の貫禄木犀にも及ぶ  
老ゆるには惜しき曼珠沙華日和  
群生は起伏に添へる曼珠沙華  
秋光に仔牛の耳の透けてをり  
この村を極楽色に柿すだけ  
すすき原夕日の色を奪ひけり

波の穂の

甲州千草

蔵元の閉ぢたるを聞く豊の秋  
大根を洗ふ左右の手の温み

ごつつんと夕日ごと落つ榎植の実  
大皿に大海の波良夜かな  
短日や卓引き寄せて作る席  
波の穂の眩しき表紙秋灯

互 恵

小松誠一

泳ぐよに芒分けゆく獣みち  
思惑の違ふ互恵や藪からし  
人生に余りなどなし敬老日  
老いてなほ放つ生彩新松子  
パソコンを辞書の代りに夜半の秋  
現世にもあまねく恵えとう灯星月夜

信 濃 柿

藤森すみれ

この小径記憶のままにそばの花  
山影やチエスの並びに藁ぼつち  
縄文の火の色灯し信濃柿  
積ん読の一角崩す台風裡

よく爆ぜる炉端を囲みミルクティー  
霧の中記憶の地図をいま一度

山 廬 行

秋 葉 雅 治

わが身にも欲しき純白障子貼る  
かつ散りて紅葉の径の山廬行  
来世またなれと暮さむ冬瓜汁  
炉開や油滴天目賞美せる  
蠟螂の鎌のまだ鋭し秋闌くる  
蓮枯れて筆一管の墨絵めく

生命の医書

鈴 木 良 戈

いろいろの虫飛ぶ墓参日和なり  
ラガー等の軋む肉体秋夕日  
萩寺は紅萩九分白一分  
川波の透けて水草紅葉かな  
月光に生命の医書のひた重く  
秋落葉本郷医書店坂がかり

曼 珠 沙 華

上 谷 昌 憲

五百万本総立ちの曼珠沙華  
一花だに横向くは無し曼珠沙華  
五百万本の孤高の曼珠沙華  
五百万の地霊の宴曼珠沙華  
木洩日に揺れて無韻の曼珠沙華  
開くまでまことすげなし曼珠沙華

菊 脛

河 口 仁 志

蓑虫の揺れをり自問自答かな  
処理場なき瓦礫の山の穴惑ひ  
蓮実飛ぶ沼のほとりの嬺歌の碑  
北山杉越え来て京の初しぐれ  
雨風に耐へて十日の残り菊  
喜寿祝ふ夕餉の膳や菊脛

気合 測上千津

高潮や老いの日々想定外  
厚き掌に握られ約す野分晴  
霜降の己に気合かけ動く  
秋風に吹き戻さるる影法師  
秋かわく母乳バンクの報せあり  
来世まで秘すことひとつ菊脛

木椅子 湯橋喜美

秋出水無明世界の水明り  
寄生木にまだ秋天といふがあり  
空澄めりうかと乗りたる空港行  
小鳥来るわが名二文字シンメトリ  
木の实降る驚声まじる子の遊び  
笹鳴や木椅子朽ちるに少し間が

既望の灯 羽根嘉津

良夜かな遺愛の松も添ふ石も  
既望の灯消し追憶のたゆたへり

丁寧にハンカチ畳み意を通す  
生きて世に後るるばかりそぞろ寒む  
露光る村人の守る秘仏堂  
稲妻や遺影いつもの笑顔にて  
稲雀 池田 崇

小気味よき運動会の音花火  
老いの手の狙ふはおんぶ蝗なり  
盗みたる水もあるなり落し水  
穴惑予約済みなる穴の前  
追ひ出して数に驚く稲雀  
菌採り用の眼のあるらしき  
一刀彫り 藤原照子

コスモスに適ひ風車に足らぬ風  
歳月の窪みまた打つばつたんこ  
病院の喫煙所とふ月明り  
蔵元の墓誌の享保新走り  
一位の実一刀彫りの一世守る  
旅にして子との同室秋惜しむ



# 潮鳴集



金の砂

七田文子

ワグナー聞ゆる満目の曼珠沙華  
穂芒の靡けば北の旅ごころ  
しばらくをタイムドラベル萩の園  
完璧は少し疲るる曼珠沙華  
ぬばたまの夜や木犀の金の砂

熾秘めて

大石

誠

スニーカーの紐の干されし柿日和  
芯に熾秘めて帯木紅葉かな  
氷川丸の船客はいま霧に繋ぐ  
夕照の色変へぬ松浄土ヶ浜  
蒼天へ飛ばせてみたき彼岸花

虫封じ

峰崎成規

「虫封じ」掲ぐる寺の虫しぐれ  
新米や昔杓文字に主婦の権  
蓮の実の飛んで抜けたき大気圏  
螻蛄鳴くや今日が延びきる二十五時  
藪からし電波は空に繁茂して

鮮度

篠藤千佳子

鰯雲ひとつひとつにある鮮度  
クレープに挟むあれこれ色鳥来  
時間まで秋の七草探しをり  
足場みな撤去されたる天の川  
一瞬で消えるデータよつくつくし

# 沖作品



## 能村研三選

大仏の螺髪六百小鳥来る

神奈川

小林 和世

久遠寺の階天へ雁渡し

宸筆の山号額字小鳥来る

山廬行露しとどなる石畳

楽器持つ少女の肩に小鳥来る

銀漢や曜変にある小宇宙

曼珠沙華畦は辰砂の帯となる

残照にいよよ焦げたる吾亦紅

瞑りても花野の色のシンフォニー

秋蝶の母かとおもふ父も来し

二歳児の自我にとんがり小鳥来る

藪枯し引いて発想転換す

外灯にぼつと灯の入る無月かな

稲妻や走り根四方へ力溜め

夜半の風踊太鼓の競ひ立ち

千葉

清部 祥子

市川市

本池美佐子

嫁と呼ぶ響も久し衣被

風立ちぬ豊葦原を分かつごと

虫の闇天動説のただ中に

青北風や繫留船に灯の点る

おのが身の焦がるるほどや唐辛子

小座敷の籠に真紅の烏瓜

岸壁の錨巻く音泡立草

走り蕎麦富士湧水を存分に

対岸に刈穂匂へる舟路かな

老農の鍬の一撃落し水

結界を示す卍や曼珠沙華

稲実る水穂の国の五円玉

お清めの光放ちて月昇る

秋桜白きは風を透くやうに

泥の手に渡す釣銭秋暮れて

長崎

円城寺 清

静岡

鈴木 齊夫

長崎

栗山みどり

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

大仏の螺髪 六百 小鳥 来る 小林 和世

小林和世さんはお住まいが鎌倉に近いので、先月も鎌倉の大仏を詠まれていた。この大仏は、鎌倉幕府が新しい都を繁栄させるために、シンボルとして造立したものだと考えられており、京都や奈良の仏像とは異なる、全く新しい造形が必要だったと言われている。螺髪は知恵を象徴するもので、「螺」は巻貝のこと、仏像によってその数は異なり、東大寺大仏は966、鎌倉大仏は656あるそうだ。鎌倉の大仏の螺髪はすべて左巻き露座仏なので、小さな鳥たちが大仏の周りを飛びかう風景は何ともおだやかである。

曼珠沙華 畦は辰砂の帯となる 清部 祥子

田の畦や土手などに鮮やかな紅を見せる曼珠沙華、ほんのりと黄色が目立ち始めた田の畦ごとに、のびる紅の帯は壯観である。この美しさを俳句にどのように表現したらよいのか、苦心するところであるが、作者は「辰砂の帯」という言葉を思いつ

いた。辰砂とは鉱物の名で、中国の辰州で多く産出されることからこの名がついた。日本では古来から「丹」と呼ばれている。田の畦に鮮紅色の帯をなす美しさは見事である。

二歳児の自我にとんがり小鳥来る 本池美佐子

二歳児は脳が発達してくるため、自我もはっきりして意思が強くなってくる時期で、別名「イヤイヤ期」とも言われている。なんでも「イヤ〜」と言い、親の言うことを全然聞いてくれない。そんな成長ぶりに少し手を焼きながらも、あたたかく見守っている家族愛が感じられる。

虫の闇 天動説のただ中に 円城寺 清

暗闇に虫の声だけ聞こえ、闇がいつそう暗く感じる。天には星、地には草叢にすだく虫。星空を見上げているうちに、自分が今佇んでいる「地球」は自ら動くことなく、空自体が動いているような視点を感じた。庭先の真つ暗な草叢が、にわか宇宙的な広がりをもって感じられたのである。

走り蕎麦 富士湧水を存分に 鈴木 齊夫

蕎麦の美味しさの秘訣は美味しい水にあると言われている。富士山に降った雨や雪は時間をかけてゆっくりと地中に浸み込んで、長い年月を経て湧き水となって地表に姿を現す。静岡の柿田川や山梨の忍野八海などが有名だが、湧水が蕎麦の味を一層引き立ててくれる。(以下略)